幼児の創造性に関する基礎的研究

飯　田　裕　子

Fundamental Study of The Child Creativity

Yuko IIDA

Recently the studies of creativity have been done widely; especially diverse investigations together with the methods of their developments have been studied concerning the problems of the creativity of adults.

In the modern information-oriented society and future society all men living there must have the creativity by all means; the basis of creativity can be found in the period of childhood.

If any novel ideas are valued and the right directions are laid down, useful and productive results will come up to our expectations.

The child creativity in reference to adults is to be duly considered; and it is much desired to investigate the problem of child creativity for the purpose of leading the child's potentiality effectively.

I. は じ め に

最近，創造性の研究は広範囲にわたって行なわれている。特に大人の創造性に関しては，その開発法にいたるまで，様々な研究がなされている。

現代情報社会，および未来社会においては，創造性はそこにすむ人間がぜひ備えていなくてはならないものである。そして，その基礎となるものは幼児期に見い出すことができるのである。幼児期におけるありきたりでない考えも，尊重されよき方向づけがなされれば，将来有意義な生産的な結果を期待することができると思われる。

幼児の創造性は，大人との関係において，また幼児期の可能性を効果的に導くためにも十分に考察していく必要がある。

II. 幼児期の創造性

人間は生まれながらにして創造性を持っている，いや持っていないなどと討議されることがある。このことは創造性を広義に可能性までを含めたものとしてみるか，または狭義に成熟されたものとしてみるかという言葉の解釈の違いに原因があるように思われる。一般に創造性とは「ある目的達成または新しい場面の問題解決に適したアイデアを生み出し，あるいは社会的・文化的（個人基準を含む）に価値あるものを造り出す能力，およびそれを基礎づける人格特性である。」[1] と定義される。

幼児期の創造性についていえばその多くは非分割結合や分割結合の水準にとどまり，現在あるものと質的に違うものを造り出すという飛躍結合の水準の発案はみられない。

しかし，子どもの示す独創的な行動やアイデアは，文化の革新をもたらすというようなものではないとしても，幼児が素材をもて遊んでいるうちに思いがけない発見をしたり，事物を見る，触れる，味わうということを通し新しい経験をするというような意欲的・自発的な活動は子どもの発達に従い，やがては成熟された創造性になりうる可能性があるわけである。幼児は存分に自己を出し，成長していく中で幼児なりの創造性を発揮させていくのである。また幼児の思考の過程は創造過程と似ており，このことからも幼児期の創造性が子どもの発達に従って，やがては成熟した創造性となる可能性をもち，将来の大切な芽ばえがそこに潜んでいることがわかるのである。

子どもは本来未知のものに対して示す探求心，または興味を持っていることや，自分の持っている能力を知ろうとする意欲，行動することを好む性質があることを否定することはできない。幼児期においては，このような人間誰もが持っている可能性と生まれながらの性質を創造性と言ってよいのではないだろうか。

また幼児はまだ生活経験が乏しいために，日々の生活そのものに新しさを感じることが多く，生活そのものが創造的であるといえる。しかし，この創造性はしばしば現実の生活の枠からみると役にたたないものであったり，わずらわしいものであったりすることが多いために周囲の大人から，幼児が創造性を発揮している時に禁止されたり，制限されたりすることが多いわけである。創造性の源となっている自発性は，自由にのびのびとふるまえる時，周囲の大人たちが子どもに対して，適度によい刺激を与える時にひき出されるものであるから，好意のない大人からの制約は子どもの自発性を抑え，ひいては創造性にストップをかけることになる。幼児の創造性は，幼児の示す行為の新しさを認めることによって育っていくことを忘れてはならないのである。

さらに，幼児の創造性を考えるのにあたり大切なことは，「その子にとって……」という規準にたって考えるということである。マズローのいう自己実現の創造性という立場に立って考えることが大切である。その子にとって新しいものを造り出したり，また発見するならば，それが成人の社会では珍しいことでなくても，それは創造性と考えられるものなのである。

III. 幼児期の創造性の発達

幼児期における特徴は，想像あるいは創造的想像が発達することである。想像の中で遊びを楽しむという幼児期の特有な現象もこのためであり，それは幼児の発達の一過程なのである。

一見，想像と創造とは全く別のことでありながら，実は密接に結びついているものなのである。創造活動にはイマジネーションが大切であり，想像力は創造力のもとになるものなのである。1つの目的を持った行動をする時には，その行動のもとになるイメージが必要である。それを行動する中でより深く，より具体的なものへと思考力によって発展させていき，行動が完成されていくのである。表現すること，行動することによって想像力は高められていき，そして今までに得た知識，技術，感覚などがすっかり自分のものとして消化され，肉体化され，創造のエネルギーとなっていくのである。

このように，想像は創造にとって必要不可欠なものである。そして幼児期の創造性の大きな特徴としてあげられるのである。

では，幼児期の創造性はどのような発達をするのか，各研究者の見解を述べると次のようになる。[3)]

○リボー (T. A. Ribot)

幼児期には想像力が飛躍的に成長し，その生活は非現実の世界が支配的になり，合理的な推理力は遅れてゆっくり成長する。また，想像力は4歳と4歳半との間に一番発達し，5歳頃には急に落ちることが発見されている。なお，創造的想像の能力は3歳から4歳半の間に頂点に達し，5歳頃になると低下する。

○アンドルース (E. G. Andrews)

想像の能力は4歳と4歳半との間に一番発達し，5歳頃は急に落ちることが発見されている。再定義し，再構成し，再結合する能力は3歳から4歳の間にピークに達し，それから後は低下する。類推能力は4歳で頂点に達し，5歳では低下する。創造的想像の 能力は3歳から4歳半の間に頂点に達し，5歳頃になると低下する。

○マーキイ (F. V. Markey)

小学校に入る前は，想像的行動は年令と共に多くなる。

○マックミラン (McMillan)

想像力の発達の中に3つの段階をつきとめ次のように言い表わしている。

1. 幼児は知識に向って一種の 近道となる美感覚を 持っている。彼女の言葉に従えば，「真珠の門と水晶の泉があり，晴れ渡った大空の下にある黄色の街」はこの段階の子どもにとって実感のあるものである。
2. 子どもは現実を 把握するようになってくる。子どもは原因と 結果を探求し，「黄金色でない街路が多くあり，汚物で濁った泉が多くあり，いつも曇った空があるのはなぜか」と聞きはじめる。
3. 子どもは除々にではあるが，あるがままの事物の世界の最初の印象から理想像をつくりはじめる。

この段階分けは，子どもの発達に伴う想像および創造的想像の世界の形成を適切に言いあらわしているように思う。

○リゴン (E. M. Ligon)

誕生から17歳に至るまでの年令別の特徴を調べた，幼児期のものだけをとり出してみると次のようになる。

・誕生から2歳まで

子どもは生まれた時から想像力を発展し始めると主張している。子どもはものの名前をたずね，音やリズムを再生しようとする。また物を創る場合，後で名前をつける。日常の決ったことは予想でき，特別のできごとを期待できるようになる。視覚，触覚，味覚によって何でも熱心に経験しようとする。子どもの好奇心は非常に強いがそれをどう表現するかは子ども自身の独自の特性にかかっている。

・2歳から4歳まで

子どもは直接経験によってまた言葉遊びや想像遊びのくり返しによって外的世界を学んでいく。子どもは自律感を持ち始め，自分で何かしようと望む。このことは自分の能力に自信を持つのに役立つ。環境に対する好奇心は依然として続き，自分自身の独自の方法で探求し，大人を困らすような質問をするようにもなる。この時期は，自分の能力の限界を試しているので，時には能力以上のことを試み失敗し，欲求不満を起すことも少なくない。

・4歳から6歳まで

すぐれた想像力を持っているが，5歳ごろを中心として年令と共に一時減少させる傾向がみられる。

この時期には計画能力がでてきて，計画することを楽しむようになる。そして，相互に無関係な事物を関連づけることができるようになる。想像的な遊びの中で多くの事を学びとっていく。またこの時期は自我と他我とが未分化の状態から分化するのである。

このように新しい経験，遊びにおける創造活動を通して，この時期は自己の創造力に自信を持つようになる頃である。

このように幼児期では，想像中心の非現実的な世界が広がり，主に感性による情緒優先の思考がなされ，論理的な思考力は未発達の時期である。

そして創造性の発達は一様でなく，多少のデコボコがみられることが特徴としてあげられる。つまり，種々の研究結果より，想像力は4歳と4歳半の間に最も伸び，5歳には一時低下するということがあげられるのである。

その理由として，人間は3歳までに人間としての一通りの生活の基礎を身につけ，これからめざましい発達をとげていこうとする下準備を整え，第一段階を躍み出すところなのである。3歳は「何でもする子」といわれるように自分で色々とやっていこうとする時期なのである。

4歳という時期は，「発見する子ども」と言われるように，自ら新しい世界を見つけ，切り開いていこうとする年代である。知的生活と，社会生活において，それは著しいものがある。自我が打ち立てられ，身体も自由に使え，他人の存在を意識する時期である。そして，想像力が非常に活発になる時期である。従って想像力が中核となっている幼児の創造性がこのころに最も伸びるということが発達上当然の事として認められるのである。

また，5歳頃に想像力が低下する理由として，次の大きな飛躍への小休止とも考えられるが，精神分析では5歳頃から12歳頃までの時期を潜伏期といって，一時本能的欲求が抑圧され，外的世界に興味を持ちはじめ，その中に秩序や法則を認めるようになる時期なのであるとしている。5歳という時期は「小型の成人」と言われ，人間の一応の完成の姿をあらわし「第一の完成期」である。5歳児は，もう一応自立し，自分を認識できる時期になってきており，自分の周りの社会と自分とを考え合す力も備ってきているのであり，それだけ社会からの圧力，固定観念等の制約を受けやすく，従って想像力が発揮しにくいといえるのではないだろうか。

幼児の想像力は抑えつけずに適切に指導，助言を与えることが，それを伸ばしていくことになる。

IV. 幼児期の創造性の育成

創造性の必要性が問かれると共に，それを育てるにはどうすればよいかがこれからの課題となってきた。KJ法，BS法，NM法，シネクティクス，自由連想法……など様々な開発法が考案された。

では幼児の場合，どのようにしてそれを育成していくことが望ましいのであろうか。現在までにはトーランスの研究を元に，幼児用の創造力テストなども開発が進み，能力測定とともに開発の研究も進められているようである。しかし，幼児の場合，幼児自身に課題を与え訓練し，それを習得させていくことも開発法としては必要であろうが，むしろそれ以上に，周囲の人たちの態度，環境が幼児の創造性に大きな作用を及ぼしているものと考えられる。いかなる環境の元に幼児の創造性がのびのびと育っていくのであるか，その手がかりとなるものを知ることが必要であると思う。

創造性の阻害条件

創造性の阻害条件とは，創造性の発揮を抑えつけているものであり，創造活動を抑止する様々な要因である。創造的に考える能力を抑えたり，行動そのものを制止したりすることにより，個人の中に潜在している能力を十分に発揮させないように活動を妨げるものである。

阻害条件についてアーノルド（Arnold, John）は認識の関，文化の関，感情の関の3つに分類しチェックリストにして解かり易く説明している。これを示すと下記の通りである。[4)]

○認識の関（Perceptual blocks）

1 真の問題をとらえそこなう
2 問題のとらえ方が不正確
　A不必要な仮定や条件をつける
　B条件を取り落とす
　C問題間の差異や類似性をそこなう
3 問題を適切な大きさでとらえていない
　A問題のとらえ方が広過ぎる
　B問題のとらえ方が狭すぎる
4 観点の固定化
5 不十分な観察
6 言葉にとらわれる
7 考えが具体物にとらわれる
8 言葉の意味の取違え
9 知識（特に専題知識）の不足
10一見平易なことを分かり切ったことと思いこむ
11各種の論理的誤診
　A合成の誤り
　B分解の誤り
　C論理的窃取の誤り
　D性急な一般化
　E因果関係の把握に関する誤り

○文化の関（Culutual blocks）

1 型にはまった考え方
　A公式やルール，決り文句に頼る考え方
　B二値的判断
　C正しい答が一つしかないと思い込む
　D固定的な価値観
2 論理の偏重
3 統計や数字の過信
4 常にレディメードの答を求める傾向
5 同調性を強いる社会的圧力
6 競争のしすぎ
7 協調のしすぎ
8 知識のありすぎ

○感情の関（Emotional blocks）

1 不安
　A変化に対する抵抗
　B完全主義
　C既知の安全な解決法を選ぶ傾向
　D性急に割り切った答を出そうとする
2 恐れ
3 フラストレーション
4 劣等感
5 自信の欠如
　A権威への追随
　B周囲の人間に過度に同調する
6 動機づけの不足（満足感，好奇心の欠如）
7 過度な動機づけ
　A早く成功しようとするあせり
　B自分に都合のよいデータばかり取上げる
8 理論や法則を過信する
9 特定のアイデアに固執する
10対人関係における不和，不信の念
11特定の人間に対する同一視

以上のように阻害条件は分析される。簡単に要約すれば，認識の関とは物の見方に由来し，対象

を正しく適切に把握することを妨げる要因である。物の存在に気づかなかったり，またはまちがった気のつき方をしてしまうことである。文化の関とは我々が教え込まれ，従ってきた社会の制度や習慣，価値の規準等から生じる制約要因である。そして感情の関とは，我々の様々な感情状態，特にネガティブな感情状態から生じる阻害要因で，バカにされたり，拒否されたりするのがいやなためについ考えをあらわさなくなってしまうようなものである。

これらの条件は個人が統制しがたいものであるが，少くともそれらの条件を意識し，その性質を理解し，介在しているものがあればそれを取り除くか，またはその影響を軽減させることの努力を試みることが必要である。また，これらの阻害条件の中には，大人の幼児に対する禁止行為の動機づけとなるものや叱る理由となるものが多く含まれている。幼児の場合には，幼児自身の問題と合わせて周りの大人たちが自らこのような要因を持ち合わせていないかどうかを反省することが大いに必要であると思われる。

・創造性の促進条件

創造性の促進条件とは，創造活動を発展させていく様々な要因であり，創造性が十分に発揮できるような刺激となるものである。

創造性を育てるためには，創造へと向う心の働きを促すような働きかけをすることが必要である。具体的にはどのようなことに留意すればよいのであろうか。その要因について，いろいろな研究者の研究結果をもとにまとめてみると，次のようになる。

1. 一定の型にはめることなく，自由にのびのび行動させる。

画一的な枠で子どもを抑えつけることは，子どもの創造的な活動の芽をつみとることになってしまう。ありきたりの考えよりも，むしろ誰も思いつかないような独創的な考え方を認めてやることの方が必要である。子どもの考え，行動をのびのびと良い方向に向けてやり，想像力をどんどん発揮させていくことが望ましい。子どもたちの自由が十分に認められている環境においてこそ，創造的能力は存分に発揮されるのである。

2. 子どもに広い知識と豊かな経験をもたせる。

創造性を発揮する基礎には広い知識が必要である。巾広い多方面にわたる活動は，子どもたちの感受性を刺激し，それを高めていきながら新しい何かを自然の中で学習させていくのである。小さな知識が集まり，それが体系化されていき，やがては大きな創造へとつながっていくのである。子どもの好奇心を大切にし，感受性を養い，直接経験を豊かに持たせ，いろいろなことを吸収させていくことが大切である。

3. 自主性を養う

創造性の高い子に育てるには意欲的な子にしなくてはならない。子どもは本来，自分の納得のいくように事実を探求し，発見し，創造していくのである。活動を禁止するよりも，むしろ何でもやればできるという気持をもたせる方が大切である。自分で考え，工夫する能力を養うことが必要である。

4. よく遊ばせる

小さい子どもであればある程，活動はすべて多少とも遊びの要素をおびている。遊びに積極的な子は全てに積極的であり，のびのびと振舞っている。このことは創造性を伸ばすために重要なことである。子どもの遊びはくり返しのようであるが，同じような遊びでもよくみると前とは変った新しいことに焦点をあてて楽しんでいるのである。そのような中に幼児の創造性を見い出すことができる。遊びは自分の考えを実現していくことであり，幼児の知的発達を促す

ことになるのである。

また，このような有意義な遊びをより発展させ育てていくには，一緒に遊ぶ人，場所，道具などといったことにも十分配慮する必要がある。

5. 周囲が子どもにとって理解的，受容的な雰囲気を持っていること。

子どもは認められ，受け入れられることによって伸びていくものである。子どもに対する周囲の接し方などによって，子どもの自信もかわってくるのである。子どもの成長と共に，この自信が不動のものになっていくのが望ましい。そのためにも周囲の者は，子どもの長所を認めそれを育てる方向への努力がなされるべきである。さらに創造活動が行き詰り，葛藤を生じるような場合でも，子どもをせきたてたり，強制したりするのでなく，子どもの発言，活動が自発的にあらわれてくるのを待つという，受容的な心がまえや態度が必要である。

創造性を安心して，思いきり発揮できるような環境をつくってやることが，創造性を育てる上に望ましいことである。

創造性を育てるということは，まずひとりひとりをその発達に応じて伸ばしていくことは勿論のこと，考え方，態度の形成，行動の決定に至るまで，周囲の影響を受けやすい幼児には，創造性を刺激し発展させるような環境を与えることが豊かな成長をのぞむことになるのである。

V. ま　と　め

子どもは成長していこうとする無限の可能性を持っている。それを十分に発揮できるように配慮する事が周りの大人の義務である。

幼児の創造性は，想像力が豊かであることに特徴づけられる。たとえ大人にとって非現実的，非生産的にみえてもそれが自然の姿であることを理解すべきである。しかし，そのまま放任しておいて創造性が伸びるというものではない。可能性としての創造性からより高次なものへと高めていこうとするならば，そこには大人の適切な指導，助言というものが必要なのである。それと同時に阻害条件をとりのぞき，積極的に創造性を育てるのに望ましい環境や条件を整える事が必要である。

幼児は活動を通して自己を具体化し，自己の実現を行なっていき，大きな充実感を得る。そしてそれを土台にして自己の世界を次々と拡げて成長していき，除々に成熟された創造性へと近づいていくのである。

付記：本研究をまとめるにあたり，御指導いただきました金平文二教授に深く感謝いたします。

引　用　文　献

1) 恩田　彰編：創造性研究の基礎，17，明治図書（1971）
2) E．P．トーランス著，佐藤三郎訳：創造性の教育，113-115，誠信書房（1966）
3) 恩田　彰編：創造性の研究，179-181，恒星社厚生閣（1971）
4) 恩田　彰編：創造的人格の形成，176-178，明治図書（1971）